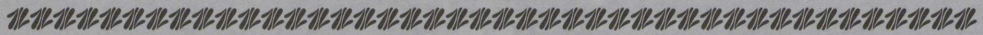


全 仏



No. 384

1992.12



第18回WFB世界仏教徒会議台湾大会開会式
(10月28日、台北市郊外「中山楼」)



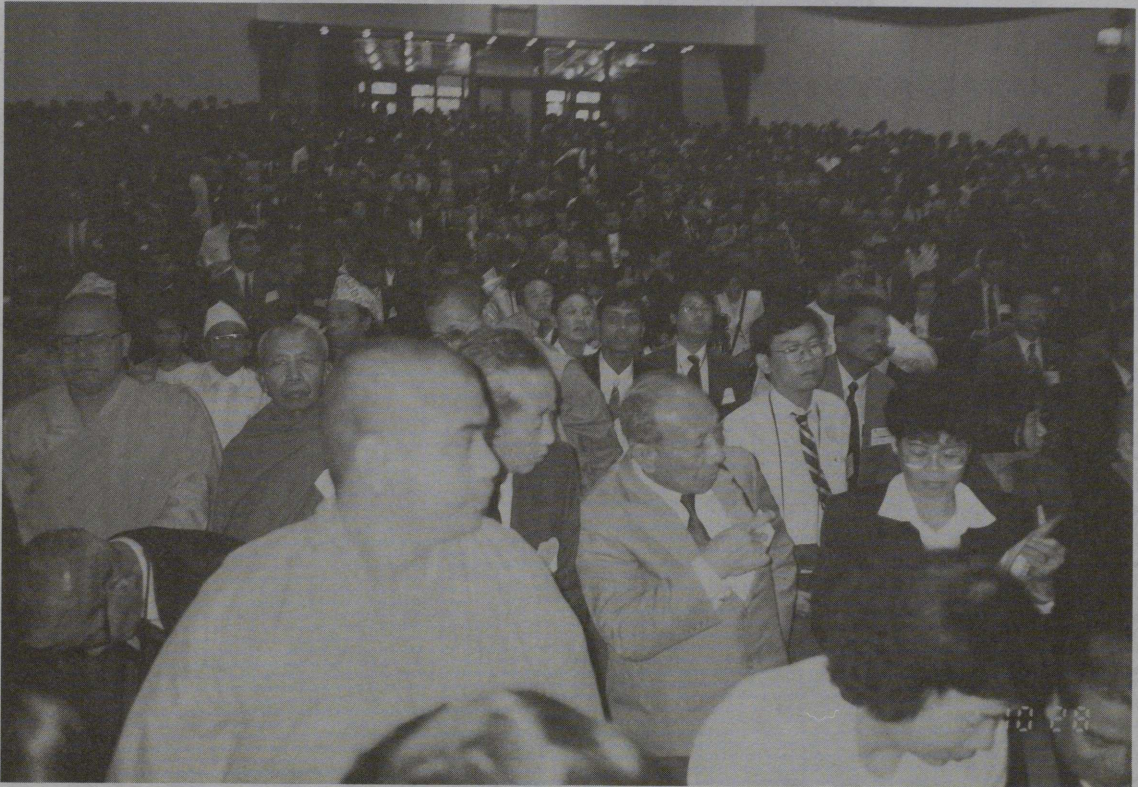
財団
法人

全日本仏教会

JAPAN BUDDHIST FEDERATION

第18回台湾大会開催

WFB



各国の仏教徒で満堂となった「中山楼」

参加者七百名

第十八回WFB世界仏教徒会議台湾大会は、去る十月二十七日から十一月三日まで、台湾（中華民国）の台北市及び、高雄市郊外の佛光山で開催された。

今回の大会には、世界各地より約七百人の仏教指導者が参集、日本からも百二十人の代表団が訪台し、各国の関係者と貴重な交流の時を持った。

まず十月二十七日は、台北市内のミラマーホテルで、執行委員会及び代表者会議が行われた。翌二十八日には、台湾の迎賓館に当たる「中山楼」を会場に、にぎにぎしく開会式が催された。

午前九時半、世界中から集まった仏教徒で満員となった大講堂の中を、プラカードを先頭に、各センターの代表が次々と入場、破れんばかりの拍手に迎えられるステージへ上がった。式典は台湾の仏教界を代表して、佛光山の星雲法師が記念講演を行い、各地域の代表から、次々と祝辞が披露された。

十一時半、式典は終了し、参加者は歓迎昼食会へ席を移した。昼食は、豪華な中華精進料理が、出席者全員に振舞われた。

十月二十九日、会場を高雄市郊外の佛光山



日本代表団結団式で挨拶する石上理事長

へ移して、第一回全体会議が、翌三十日には、各常設委員会が開かれた。
会議は三十一日の第二回全体会議で終了、この席で新役員が選出され、次回の第十九回WFB大会は、タイのバンコクで開催される



ミラマーホテルで行われた代表者会議

ことが決定した。
十一月一日、高雄市内の主要寺院参拝が行われ、二日午前の閉会式で、第十八回WFB

大会は、全ての日程を終了した。
閉会式の後、日本代表団は、佛光山の星雲法師を表敬訪問し、懇談した。この席で、法師より、今後、日本の仏教界とより活発な交流を推進したいという、見解が表明された。

この大会に出席された国際委員長松濤弘道師は、次のような感想を寄せられている。

「今回の大会に全日本仏教会の代表の一員として参加させて頂き、主催者および関係各位のご尽力に対して深く感謝申し上げますと共に、これを機会に今後の仏教活動がそれぞれの場において一層活発化することをここから祈念したい。

なお、大会に出席する折角の好機を与えられたので、今後このような集いをもしわが国で開催する場合は、ご参考までに小生の抱いた反省点のいくつかを指摘してみたいと思う。

①参加者の大会に寄せる期待や動機が異なり、短期間の開催ではその内容も総花的かつ皮相

的にならざるをえない。したがって、開、閉
 会式は別として、会議やフォーラムや交歓の
 場などを参加者には選択させて同時開催するの
 も一法であろう。

②大会開催場所と宿泊を同一場所にし、な



佛光山で歓迎を受ける各国代表团

るべく参加者の移動を避け、時間や労力の節
 約をする。会議には同時通訳が望ましい。

③一部の発言者によって会則の変更や役員
 の選出等に時間をとられ、議事の進行が停滞
 し、他の大多数の大会出席者を飽きさせがち



財政委員会で議長を務める松濤弘道師(中央)

なので、そうした審議は事前に根回しして、
 全体会議ではその結果を承認するだけのもの
 とする。

④大会でいくら提案事項を討議し決議した
 ところで、その実現には人的、経済的な負担



会場前の日本代表团

全 仏

サヨナラパーティで挨拶する中村啓識副会長



を伴うものであるから、本部や他に期待する代わりに参加団体各自が具体案を持ち、独自に実行可能なものを採択する。
⑤したがって、わが国では率先して日本仏教に関する日英両文の「ハンドブック」を作

佛光山檀信徒会館で行われた閉会式



成したら如何か。その概要は、日本仏教小史、仏教教団の現況、出版物、伝道用具紹介、主要仏教寺院、修行道場、教育機関の紹介など。
⑥会場にて仏教資料展などの開催や仏書、仏具、仏像など仏教活動への必需品を展示、

星雲法師と懇談する篠本事務総長



即売する。
⑦その他、大会を実のある有意義なものとするための事業を促進し、その存在価値を内外にアピールする。」

今日の葬儀の問題点

村上興匡(文化庁宗務課
専門職員)

去る十月九日午後一時から、西本願寺宗務所会議室で、文化庁宗務課勉強会が開かれた。今回は、『葬儀の社会史―都市化・近代化と葬祭慣習の変遷』というテーマで、宗務課専門職員の上興匡師が発表を行った。

東京における葬儀の変化を、明治初期から具体的に検証された村上師は、天台宗僧侶でもあり、発表内容は大変に示唆に富むものだった。そこで発表の最後の部分「葬儀批判と今日の葬儀システムの問題点」の要旨をご紹介します。(文責・社会部)

※ ※ ※

全体的な流れとしていえることは、東京における葬儀が、非常に個人化しているということである。その傾向は、社会一般に広まっている。それが、過去の共同体的な葬儀、つまり祖先祭祀を中心としたような葬儀を前提にしていくと、かなり矛盾を引き起こしてしまふ。そういう矛盾に対して、今日の「葬儀批判」は集中しているのではないか。

現在の仏教に対する批判は、いわゆる葬式仏教イコール仏教墮落論という形になってい

る。この中でいわれるのは、葬儀費用つまり布施が、非常なインフレ状況にあるということだ。それを引き起こしているのは、死者の顕彰と遺族の見栄という問題である。

共同体の中では、ある程度、地位に見合った出費を強いられることがある。逆にいえば、出費を行うことによって、社会的地位を獲得するという側面があるということだ。遺族の見栄が、無駄な費用を葬儀にかけるようになってきている。しかし、葬儀費用のインフレに対する批判は、新しいものではなく、明治三〇年代から、既におこっている。

次に寺檀関係の顧客化、つまり葬儀のみによつての寺とのつき合いという現象がある。これは檀家の地域的まとまりの減少に原因している。檀家の会員化ということだ。

東京のほとんどの寺院では、寺の回りに檀家が集中しているということはない。私が調査した寺でも、八割の檀家は寺と同じ区以外にあった。残りの二割も、代々その寺の檀家というわけではなく、たまたま近くにあるからという理由で、新しく入檀した家がほとん

どだそうだ。

地方ではまだ地域的まとまりがあり、総代が口も出すが、寺の運営に関しても責任を持つてくれるという意味で、正常な寺檀関係が機能しているというか、建前通りになっていると思われる。これに対して東京の檀家は、お金は出すかもしれないが、出来れば寺との関わりは持ちたくないという人が多く、どうしても、寺は住職家による運営が中心となつてくる。

寺はかなり収入があるにもかかわらず、その運営を住職家が専有しているため「金満坊主」などといわれるようになる。そうした中で、お布施というものは、単に葬儀という宗教的サービスを受けた対価として考えられてきているのではないか。都市部では、葬儀がサービス業化しているからこそ、寺院が葬儀屋に使われるような状態になっている。

葬儀はビジネスであり、そのビジネスにおいて、顧客の情報を握っている葬祭業者が、それを握っていない弱小企業としての寺院を傘下に収めるという現象が確かにある。

こうしたことを反省すると、今日の葬儀にはいくつ問題がある。第一に、これまでの葬儀システムは、家および地域共同体を前提として出来上がっていた。ところが現在、家も地域共同体も衰退し、祖先祭祀は形骸化し

ている。

昔であれば、生産財としての家は、代々継承されていたわけだが、都市におけるサラリーマンの場合は、相続税の関係などもあって、それほど大きな資産を子孫に残せない。そのため、現在の社会において家は、特に都市では形骸化していく。

ところが葬儀の前提となっているものは、家祖祖先祭祀であるところに関係がある。それは死の個人化ということに関係していく。

次に、日常生活の中で、死を見つめない社会が近代社会であった。死は病院と葬儀屋まかせになっていた。まかせても、自然に葬儀が行われるようなシステムを、近代社会は創り上げてきたのだ。そこで行われる葬儀は、システムマチックである反面、いわゆるマスプロ、個性のないものになってしまう。この中で、自分の葬儀、自己の死を、自分の手元に引き寄せていこうという動きが、現在起きている。

これは高齢化社会の到来が原因である。昔は、死は家の問題、家の後継ぎを考える問題であって、本人が考える問題ではなかった。家というものが危うくなって、初めて個人が自分の死を考えるようになった。

単に自分の死にお金をかけるのではなく、

別の形で他と差異化をはかっていくということが、現在、葬祭業におけるいろいろなアイデアにみられる。レーザー光線を使った野辺送りのように、一つの方向はより華美に、逆に自然葬、散骨のように、自分の死を創っていくという傾向もある。

近代社会は、生産中心で、死に対して比較的無関心であったからこそ、無関心でいられるようなシステムを創ってきたともいえるが、それに対する反省として、現在の様々なトレンドがある。

以上は、葬儀を行う側の問題だが、もちろん寺院制度にも問題がある。『曹洞宗勢調査報告書』などによれば、都市と地方との寺院における経済格差は、非常に大きい。しかしごく一部の収入が多い都市部の寺院のイメージが、マスコミによって流されるため、全てのお寺が儲かっているかのように、みられてしまう。

こうした人口の過密と過疎という問題に対して、仏教教団は対応しきれないでいる。その中で寺院の世襲化が問題となる。日本のお寺は、成立の当初から、仏教という名前を掲げながらも、実は祖先祭祀を司どってきたという伝統があった。その行き着いた先が、現在の「僧侶の世襲化」ということだと考えられるのではないか。過密と過疎の不均衡など

は、包括宗教法(人(教団))の方で対応しなければならぬが、簡単に単立化出来るため、それほど強く制約出来ないという、むしろかしい問題がある。

僧侶の世襲化は、寺院運営の個人化につながる。そうした中で、葬式を行う側が、「もやいの会」のような、自分の死をどう見ていくか模索していろいろな共同体を作ろうという試みを始めている。

それに対して寺院の側も、対応する方向を考えていかなければならない。そうしないと、あれは宗教ではなく営利事業だという批判が、ますます強まるだろう。

一九九三年版

全仏手帳

申込み受付中

全日本仏教会では、左記要領にて、「全仏手帳」を発行します。部数に限りがございますので、ご注文はお早めに。

内容 三帰依文、四弘誓願、宗門聖日、

加盟団体役員住所録その他

サイズ 9×14cm

定価 七〇〇円(送料実費)

申込先 東京都港区芝公園四一七―四

全日本仏教会

「全仏手帳係」係

同宗連の研修会

京都西教寺で

「同宗連」(『同和問題』)にとりくむ宗教教団連帯会議(主催による、第二十二回「同宗連」研修会が、去る十月七、八の両日、天台真盛宗総本山の西教寺研修道場を会場に開催された。

「同宗連」加盟の仏教、キリスト教、神道、新宗教、教派神道などの諸団体から、約六十名が参加、熱心に研修を行った。

七日午後一時半から開会式が行われ、山北光彦「同宗連」事務局長の挨拶につづいて、二日間の日程に関するオリエンテーションが行われた。

午後二時から、研修に入る。今回の研修会は、「模擬陪審劇」を通して狭山事件を考える事が研修内容になっており、参加者はまず最初に狭山事件の概要についてレクチャーを受け、つづいて、狭山裁判に関する「造花の判決」、「模擬陪審劇」の二本のビデオを鑑賞した。

「造花の判決」は、狭山事件裁判弾劾闘争を題材にした映画。一人の司法修習生を主人公に、部落差別問題を考えて行くドラマである。

「模擬陪審劇」は、狭山裁判を再現し、その矛盾点を提起する。参加者は自ら陪審員の立場に立ちながら狭山事件を学習していた。その後、夕食をさみ午後六時から五つの分散会に分かれ、討議研修を行い、第一日目の日程を終了。

第二日目は午前九時から分散会を再開し、午前十一時から全体会が行われた。各分散会の参加者からは、今まで断片的に知っていた狭山事件について、本研修会に参加する事によって、ほぼ全容を知る事ができたとの声が多くあった。

引き続き閉会式が行われ、二日間にわたる全日程を終了した。

事務局録事

十一月一日

四日 局内会議

六日 全青協創立三十周年記念式典出席

八日 隠元禅師生誕四百年法要参列

九日 日韓仏教文化交流大会出席

局内会議

十日 増上寺開創六百年法要参列

十二日 日宗連税制シンポジウム出席
 十二日～十三日 同和研修会
 十三日～二十一日 ネパール現地調査
 十四日 念法真教差別図書法要参列

十九日 囲碁大会

二十一日 智積院被差別戒名法要参列

二十四日 同和委員会

日宗連理事會

二十五日 上杉佐一郎氏祝賀会出席

二十六日 大阪府仏教徒大会出席

ルンビニー委員会

法律相談室

二十七日 全日仏婦大会出席

寺院用具

浅草通り五鳳会加盟店

株式会社 浜田商店

東京都台東区寿2-10-9 (地下鉄田原町駅前)

電話 代表 (3841) 4965